

# アジアにおける近代初期の地理資料発掘・利用による環境変化研究 Approaches to Modern Geographical Data in Asia for the Study of Environmental Changes

松本 淳(首都大)・小林 茂(大阪大)

Jun MATSUMOTO (Tokyo Metropolitan Univ.), Shigeru KOBAYASHI (Osaka Univ.)

キーワード：アジア、近代、気象観測資料、地図、環境変化

Keywords: Asia, Modern times, Meteorological data, Maps, Environmental Change

**はじめに** 地球環境の変動がグローバル・イシューになりながらも、なお不確定な要素がつきまとうひとつの原因は、本格的な器械による観測の期間がみじかく、しかも空間的に不均等という点にもとめられる。とくにアジア地域の場合、各種の観測の体制化がおくれ、長期的な観測記録がすくなく、環境の変動といっても、検討する時期をさかのぼらせることは容易ではない。

これに関連してもうひとつ考慮すべきは、アジア地域の環境に関連する観測資料が、かならずしも充分に利用されているわけではないという点である。たとえば気象観測は、中国においてはイエズス会士によって開始されたが、その資料の本格的集成は、近年になってはじめられたところである。日本についても、長崎の出島におけるオランダ人の気象観測資料（在オランダ王立気象研究所など）の収集と検討などが開始されたが、さらに努力が要請されている。このような利用されていない環境変化に関連する資料は、視野を広げてみると、さまざまな方面でみとめられ、その発掘と整備が各方面で行われつつある。本シンポジウムでは、こうした研究の進行を紹介し経験や知見を交換するだけでなく、今後のデータ整備にむけて、どのような作業が必要か、考えることを目的としている。発掘から利用まで、この種の資料に関する問題に多面的にアプローチしたい。

**資料の広がり**と**所在** オーガナイザーのうち小林は、2007年以降アメリカ議会図書館で資料調査を継続し、第二次世界大戦終結後にアメリカに接収された多彩な資料のなかには、環境や景観に関連する多様な素材があることを知った。アジア太平洋各地の気象観測の結果を記入した手描き資料（例：新知〔しむしる〕気象観測所『霧観測野帳』1939年など）のほか、観測データを集成した

「気象月報原簿」（例：東沙島派遣隊、1943年など）、さらに印刷された冊子（例：『北支那気象月報』第九八八二部隊、1943年など）のほか、各種地図（例：1880年代の朝鮮半島・中国大陸の日本軍将校による測量原図）、さらに中国安徽省・江蘇書の日本軍撮影の空中写真（1942～3年）ときわめて多彩である。まだ断片的なものがすくなくないが、アジア地域に関する環境資料の中には、このように埋もれているものが少なからずあり、発掘と集成がもとめられている。

**目録の整備、資料の作製過程の調査** 発掘された資料は、しかしそのままでは利用が困難である。記載項目のととのった目録や一覧図とともに、各資料の作製過程の調査が必要になる。資料を作製した主体にはじまり、観測や測量の方法や精度、継続期間に関するデータがそろわることが望ましい。これらの調査では、歴史学的知識も必要で、植民地の行政組織や軍の観測・測量組織への関心も不可欠である。こうした点から、環境研究者だけでなく、歴史学者や歴史地理学者との協力も積極的にすすめる必要がある。

**データの集成** 図書館などに埋もれていた資料を、環境や景観の変化の研究に利用できるデータにするには、以上のような作業を経たうえで集成される必要がある。本格的に利用できるようになるまで、長期間が必要なだけでなく、さらなる活用に向けて新しい枠組の開発も必要になると考えられる。くわえて、集成されたデータの適切な公開も考慮すべきであろう。これがなければ、資料は再度埋もれてしまうことになる。

本シンポジウムでは、以上のような角度から、未使用のまま埋もれ、廃棄される状況にある地理資料の発掘・利用に向けて、経験と知識を共有し、今後の環境変化研究を展望したい。